

---

# 仕立屋娘と准侯爵の事情

水森 白子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仕立屋娘と准侯爵の事情

### 【Nコード】

N5099S

### 【作者名】

水森 白子

### 【あらすじ】

身に覚えのない罪で、どこかへ連れ去られる仕立屋セロン。助けてくれた准侯爵ウィレムに「このまま、翻弄される人生が、僕に協力するか？」  
選択の余地なく彼の手を取ったセロン。協力すると言ったけど、本当にコレで大丈夫なの？

差別、暴力表現がありますので、苦手な方はご注意ください。

## 前編（前書き）

新たな話になります。

お付き合い頂けると幸いです。

## 前編

小国レン・テリア

貴族文化が花開き、栄えているこの国では、貴族御用達の職人や芸術家達を自分の屋敷で雇い、多くの作品を世に出していた。そんな華やかな時代の話。

セロン・デイケンス(九重)もその一人として、お針子から、ドレスのデザイン、縫製、流行を生み出す

「仕立師」の称号を得る為に、経験を積もうとがんばっていた。

15歳という若さ、黒髪に黒い瞳を持つ混血児でも、「ピンセント・スミス」工房主、スミス氏に厳しくも可愛がられ、

今回の仕事も渋るスミス氏を説得して、ようやく掴んだ仕事だ。

セロンは、失敗をするわけにはいかないと、意気込んで名門ベインズ家の門をくぐったことを、今、後悔し始めていた。

「ねえ、胸が苦しいわ。もう少し緩めて。」

美しい赤茶の巻き毛を背中に払いながら、雇い主である

アネット・ユリア・ベインズは胸元でドレープを整えていたセロンに言った。

「えっ？昨日は大丈夫でしたよね？」

昨日は逆に余っていた胸元を確認している。

「昨日より育ったのよ。あなたと違ってね……。」

くすくすと後ろに控えていた侍女達が笑い出し、

アネットもセロンを上から下まで見つめ、15歳にしてはペタンコな体を馬鹿にしたように薄く笑い「今日はここまでいいわ。」と、仮縫いのドレスを脱がすように顎をしゃくった。

(胸に詰め物をするなら先に言ってほしいわ!!)

せっかくごまかす為に入れたドレープを入れたところだったのに!

顔には出さずも、ムツとしながら手を動かして、ドレスを脱がせて行く。

この仕事を引き受けてから、何度目の調整なのかと、ため息をつきたいのをグツと我慢して、再度手直しをする為にドレスを持って部屋から出て行った。

「いじめすぎましたかね?アネット様。」

クスリと笑いながら侍女が尋ねた。

「構わないわ。ここ最近じゃ一番のお針子ですもの。」

さすがはビンセント・スミス工房の秘蔵っ子よね。

何度、手直しさせても綺麗なドレスを作ってくるわ。混血児なのが惜しい才能よね。」

17歳にして、妖艶な笑みを浮かべるアネットに侍女達は顔を見合わせた。

「では、セロンはキュアールに送りますか?アネット様。」

その言葉に頼杖をつきながらアネットは少し考え込み、

「そうね。そろそろとは思っていたけど、今回の舞踏会が

いい機会だわ。お父様にも一役買っていたいただきましょう。」

あの子には私が飽きるまでずっとドレスを作ってもらわなくちゃ。」

楽しい玩具を見つけたかのような無邪気な笑顔でアネットは言った。

「ああ、アネット様が飽きてしまっても、私達にもドレスを作っていただけですよね?」

「うふふ。もちろんよ。キュアールに入れられて、ドレスを作らなかつたら、あつという間に今よりもやせっぽっちになっちゃおうわ。」

「誰も、混血児一人居なくなっても、気にも留めませんよねえ。」

「まあ、物騒な話ね。誰が聞いてるかわからなくてよ。」  
楽しそうに話されている内容など露知らず、セロンは与えられていた小さな作業部屋で黙々とドレスを縫い付けていた。

―数日後―

ドレスを作り終えたセロンは、舞踏会に出かけるアネットを侍女達と一緒に見送り、工房に帰ろうとしたところ、何故か侍女達に引き止められ、

食べたことがないでしょう？と、お茶菓子を振舞われ、

私はシフォンが好きなのといきなりドレス生地の話が振られ、

訳が分からない内に、夜も更けてしまっていた。

そして、普通であれば舞踏会が始まる時間帯にアネットが青ざめた顔で帰宅してきたのだった。

それから、少し経って、ベインズ公付の侍従がセロンを呼びに来た。何の用だろうと首をかしげながら、応接間に入ると、

今日の舞踏会用に作ったドレスが無造作に床に放り出されており、セロンは（しわになってしまっ！）と、慌ててドレスに近寄ろうとした時、

「来たか。このドブネズミが！！！」

お前ごときがなんてことをしてくれた！！！」

浴びせられた罵声にビクリと体が固まってしまった。そして、後ろに控えていた侍従にいきなり腕をひねり上げられ、ひざについてベインズ公とアネットに頭を下げさせられた。

（何？何が起こっているの？）

パニックに陥っているセロンを本物のドブネズミを見ているかのようには顔をしかめ、40代そこそこで、この小国レン・テリアの大貴族の一人であるベインズ公爵には、セロンの様な混血児の小娘など取るに足らない存在。感情のままに怒鳴りつけても痛くも痒くもな

いのである。

「お父様……。」

未だに青ざめた顔をしながら、アネットがそつと父に寄り添う。溺愛する娘に宥められたのか、少し落ち着いたベインズ公は、いらは残しながら口を開いた。

「今日、アネットが参加した舞踏会のドレスを作ったのはお前だな？ セロン・ディケンズいや、九重くのえだったか。混血児にこのレン・テリアなど必要ないからな。」

ハツと、鼻で笑いながら、床に放り出されたままのドレスを踏みつけた。

何の確認なのかわからないまま、踏まれているドレスを見つめながら「はい。」と答えた。

「舞踏会のホスト役であるモイラ・クライン夫人の使用人と頻繁にやり取りをしていたようだな？」

頻繁かどうかは分からなかったが、ドレスを作る際の情報交換として（アネットの侍女達は何もしてくれなかった為）クライン家に連絡を取っていたのは事実なので、「はい。」と答えた。

「アネットは、クライン家の入り口で追い返された。

その意味、分かっているだろう！！

お前が作ったドレスがクライン夫人と同じ趣向のものとはどういうつもりだ？

このベインズ家の娘が、私のアネットが恥をかかされたんだぞ！！

！！！！！！

「！！！！！！！！！！（そんな馬鹿な！）」

（何度も確認して、色や素材、クライン夫人の年齢に関してまで調べたはずなのにそんなことはありえない！！！！）

激昂し、罵声を浴びながら、セロンはひねりあげられたまま、こぶしを握り締め、上目づかいに父を宥めるアネットをにらみつけた（あなたの仕業か！！）  
そんな、セロンをチラリと見つめながら、アネットは楽しそうに、そして美しく微笑んだ。

「お父様。誰にでも間違いはありますわ。それに私は、クライン家の執事が良いように計らってくださいましたもの。」

実際には、舞踏会の会場には、入ってはいませんわ。モイラ・クライン夫人にはすぐにお詫びを致しましたら、大事にしなくても大丈夫よ。」

「ぬっ？だがな、アネット。お前はコレに恥をかかされたことに代わりはないじゃないか。」

少し、勢いが弱まったベインズ公に、アネットはふふと、笑い、

「では、私わたくしにこの件、任せていただけける？」

「アネット……。まだコレを雇う気があるのか？」

「ええ、すばらしい才能の持ち主ですもの。表に出ることは、今後わたくしもこの子の素性からは、難しいでしょう？でも、キュアールなら私専用のお針子としていられますもの。この子にとっても嬉しいことばかりじゃなくて？」

いい提案だとばかりにアネットは、父親にモノをおねだりする様に甘ったるい声を上げた。

（キュアール？専用のお針子って……）

冗談じゃないわ！何で私が、わがまま貴族の玩具にされなくちゃいけないの！！）

訝しげに父娘の会話を聞きながら、セロンは押さえられている体を動かして、身じろいだ。

ベインズ公は、少し渋ってはいたが、愛娘のおねだりに強くは出れ

なかったようだ。セロンを押さえつけていた侍従に、何か合図をした。

「?!?!?!」

急に腕を持ち上げられ、無表情な侍従の顔を見たと思ったら、腹部に痛みが走り、セロンの意識は暗闇に捕らわれた。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

ガラガラガラガラガラガラ、ガツンッ!!

身体の下から来た衝撃にセロンは、薄く目を開けた。頬にザラザラした感触があり、ぼんやりした頭に再び、

ガツン!!!!

と、衝撃を感じて、ハッと目が覚めた瞬間、飛び起きた。

「!!!!!!つうっ!」

腹部の鋭い痛みがあり、暗闇に捕らわれる前に、ベインズ公の侍従に殴られたことを思い出した。浅く息をしながら、周りをそろそろと見渡す。

(?????)

真っ暗な部屋にいるのかと思ったが、身体下の衝撃は、移動をしている。

荷馬車かなにかに転がされているのだろう。

お腹を押さえると、ジンジンしてる。きっと青あざになっているだろうな。と、ため息をついた。

意識がなくなる前に聞いたベインズ父娘の会話から、自分は「キユール」という、

最悪な場所に連れて行かれるんだらうと、答えにたどり着いてしまったセロンは、工房主のスミス氏が最後まで心配していたことが、当たるなんて思わなかった。

こんなことになるくらいなら、さっさと逃げてしまえば良かった。後悔と罨にはめたアネットの笑い顔を思い出すと、悔しくて涙がこぼれた。

しばらく泣いていたが、まだ逃げられるチャンスがあるかもしれないと、

周りを手探りで何かないかと、探索してみた。

手は何故か自由だったが、足を解けないほどきつく縛られており、そのまま縄は、荷馬車のどこかに縛られているらしい。

(飛び降りることは難しいみたい・・・)

ふと、自分の作業着のドレスのままだと気がついて、内ポケットにある糸切バサミを見つけた。

暗い中で縄を切るのは大変だったが、セロンはあきらめずに腕を動かして続けた。

数本の縄を切ることに成功したセロンはあと少しだと、汗で滑る糸切バサミをグツと握り、縄に切れ目を入れていた。そんな時、荷馬車が大きく揺れ、馬の嘶きが聞こえた。

「ぐあっ!!」男の声と、ドサツツという音がしたと思ったら、荷馬車が止まった。

「・・・?」

近づいてくる足音にぎゅうっと糸切バサミを握り締め、息を殺した。

バサツと、荷馬車を覆っていた幕が捲られ、夜明けが近いのか朝もやに包まれて、目深にフードをかぶった男がこちらを見つけ、ガツと荷馬車に駆けあがり、糸切バサミを握るセロンの手を暖かいぬく

もりが包んだと思つたら、

「何やつてる？死にたいのか！」

若い男性の声だったが、セロンにベインズ公の罵声を思い出させるには充分だった。

急に小刻みに震えるセロンに、ハツとしたように男性は、声を和らげた。

「僕は味方だ。大丈夫だから、この手を離して。」

何かが決壊したように、ボロボロと涙をこぼす少女に、男性は顔を覆っていたフードを外した。

「君がまだ生きていてくれて良かった。」

朝もやの中で、艶のある濃いブラウンの髪と切れ長な瞳の優しげな面立ちの青年は、にっこり笑った。

セロンの涙は止まらなかつたが、不思議と震えは止まった。

視界が涙でぼやけていたが、突然、自分の味方だといっているこの青年。

(誰なんだろう?)

青年は、糸切バサミをそつと抜き取るとセロンに尋ねた。

「君は、ビンセント・スミス工房の子だよね？」

自分を知っている人だったのか！と、びっくりしながら頷いた。

「君をこんな目に合わせたのは誰？」

「・・・、ベインズ公爵と娘のアネットです。」

私は、言われたとおりにドレスを作っただけ・・・。」

「どこに連れて行かれるかは聞いた？」

「キュアール・・・。どこにあるかは知りません。連れて行かれる途中だったみたい。」

そこで、多分死ぬまでドレスを作らされるみたいだった。」

「酷いな・・・、女の子を拉致監禁だなんて・・・。」

眉間にしわを寄せ、嫌悪感を出す青年を見ながら、セロンは

(綺麗な顔の人は、どんな表情でも綺麗なのね・・・。)

と、青年を見つめていた。

少し考え込んでいた青年は、セロンに向き直ると、

「君は、このまま貴族の思惑に翻弄される人生を選ぶ？」

それとも、僕に協力して見る？」

「?どういうことですか？」

「そのままの意味だけど、君の作るドレスがすばらしかったから、ベインズ公は君をどこかに閉じ込めて働かせようと思った。なら、ここで君が逃げてしまっても、彼らは必ず君を捕まえに来るよ。」  
アネットの笑い声が聞こえてくるようだった。

(あなたは、私専用のお針子なのよ。)

自分を捕まえる為に、多分、うそをついて今日の舞踏会の騒ぎを起こしたのだろう。

逃げても再び、あの赤茶の美しい髪と笑みを浮かべてやってくるのでは、確かに貴族に翻弄される人生だ。

青ざめてしまった少女に、脅かしすぎたか?と、顔を覗き込むと少女は意外にしっかりと、黒い黒曜石の瞳で自分を見つめた。

「何をすれば、良いのですか？」

青年は微笑みながら、

「僕の復讐に協力してほしい。」

セロンは頷き、青年の手を取った。

(おまけ)

縛られていた縄を切って、荷馬車から出ようとしたが、腹部の痛みと体が強張って、なかなか動かなかつた。

青年は、先に降りてセロンの脇に手を入れてそのまま持ち上げ、眉を潜めた。

「軽すぎじゃない？ちゃんと食べないと大きくなれないよ。」

子供のように見える黒髪と幼い顔立ちに言っているのだろうが、15歳のセロンにとっては、

別の部分を言われた気がして、カツと赤くなると、ふいつと顔を背けた。

そんな様子を見た青年は面白いものを見たように、

「・・・可愛いなあ。拾った子猫みたいだ。早く懐いてもらわないとね。」

と、切れ長の瞳に柔らかく見つめられながら言われたのだが、セロンは足元からゾクゾクと、寒気が襲ってきて、お腹が痛がるうが、足に力が入らなかるうが、ぶらんぶらんしている足を必死に動かして青年から逃げようとした。

「ふふふ、これから楽しみだな。」

と、近くに繋いでいた馬にセロンを乗せると、ひらりと後ろに跨り、「しっかり捕まっけてね、口は閉じて、具合が悪くなったら僕に抱きつくこと！飛ばすからそのつもりでね。」

ウインク付で言われた言葉に「無理です!!」

と、言うまもなく馬が駆け出し、セロンは躊躇する間もなく、青年に抱きついたのであった。

前編（後書き）

ああ。長いですね。

「おまけ」まで、すいません（>）  
（<）

中編まで、お待ち下さいませ。

（<）  
（>）

中編？

ギョツとしがみついで、可愛いなあと、馬を走らせていたが、子供特有のぬくもりには、熱すぎないか？と、気づいたときには、少女は、ぐったりとして気を失っていた。

慌てて、邸に連れ帰ると、明け方だというのに老執事のラモントが扉を開けて開口一番、

「お帰りなさいませ、ウイレム様。随分早いおか・・・」

ウイレムに抱かれ、浅い呼吸をしている少女に少し眉を動かし、ウイレムの腕から攫うように抱きかかえると、踵を返しながら、

「ウイレム様、馬のご準備を！」

「・・・僕が？」

「熱が高いですな。エセラも直ぐに起こして、部屋を用意させます。医師をお呼び下さいませ。ウイレム様！！早くっ！！」

あまり、感情を露わにしない老執事から、追い出される様に邸を後にする。

「・・・ベルナを思い出させたか・・・悪い、ラモント。」

苦い顔をして、今まで腕の中にあっただぬくもりを思い出しながら、医師を呼ぶため、再び馬上の人となった。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

一瞬、聞き間違えたのかとアネットは、入口に立つ従者に再度、尋ねた。

「あの娘が居なくなっただけ？キュアールに送ったのでしょうか？まさか、死んだの？」

「いえ、何者かに連れ去られたようです。」

「どういふことかしら。」

苛立たしげに、紅茶のカップを置くと、従者を睨みつけた。

「あの者を運んだのは、此方とは縁のない金で雇われた者ですが、キュアールに到着する前に襲われたようで、結んでいた縄が刃物で切られており・・・もういいわ!」

従者を遮り、アネットは勢い良く立ち上がると鏡台の前に置いてあった箱から、届いたばかりの豪華なネックレスを取り出し、床に叩きつけた。

「コレに合うドレスが欲しかったのに台無しじゃない! 見つけ出しなさい!

何が何でも捕まえて、私のドレスを作らせるのよ!」

癩癩を起こしたアネットをおろおろと、不安そうに見つめていた侍女の一人が口を開いた。

「アネット様・・・大丈夫でしょうか? あの者が連れ去られたことで、こちらに何か困ることが

起きるのではないのでしょうか?」

「何を不安に思うのよ。混血児のお針子よ。あの娘が何を言っても意味は無いわ!

それに、私は、才能ある者を保護しようとキュアールに送ったのよ。その代償として、私のドレスを作ることがいけないこと?」

強気な言い訳に侍女は小さくなって壁際に下がった。

「ビンセント・スミス工房には、どの様に?」

従者が尋ねた。

「・・・シーズンが終わるまでは、仕事を続けると言っておけばいいわ。」

どうせ、捕まえてしまえば、そのまま行方不明になるのだから構わないわ。」

従者は軽く頷き、一礼して下がろうとした。

「あなた、見ない顔だけど最近入ったの？」

アネットが従者を見つめて言った。

「はい。半年ほど前からおりますが、お嬢様にお会いしたのは、今月に入ってからです。」

「そう……、その割には、ずいぶん早くにキュアールに関わっているのね？」

「……汚れた仕事をするのが専門でしたので……。」

それを聞いたアネットは、赤い唇をニイと歪ませた。

「あの娘を見つけ出して、一番初めに私の前に連れてきなさい。」

ドレスを作れるなら、どんな状態でも構わないわ……。」

「……畏まりました。」

再び、一礼して従者は部屋を出ていった。

くすくすと楽しそうに笑い出したアネットを訝しげに侍女達は見つめた。

「私からは、逃げられないわよ……。」

「そこまで、あの者にこだわらなくても、別のお針子を雇い入れれば……。」

「……別では意味が無いのよ。」

（初めて見たときから、強い意思を持って私を見つめたあの黒い瞳、いくらやり直しや嫌がらせをしても変わらずに、私を睨み付けた。あの娘のドレスを作る矜持は本物だ。

どんな状態でも、ドレスを作らざるにいられないはず……。あの娘が作ったドレスを手に入れられるなら、必ず仲介者や協力している者の傍に居る。

あなたは、ドレスを作ることで、私に近づいてくるのよ……。）

「私は、ただ、待っていればいいだけ。」

すぐに捕まえてあげるわ。それまでは、好きにさせておくわ。・・・  
・セロン。」

笑いが堪えられないのか、高笑いを繰り返す主に、侍女達は怯えずにはいられなかった。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

セロンが目覚めたとき、天国に来てしまったのかと、しばらくぼう  
つとしたまま天井を見つめていた。

柔らかいベッドに、良い匂いのリネンのさらさらした感触がセロン  
を包み込んでいたからだ。

（嫌な夢を見ていたと思っていたのに・・・、気持ち良い・・・  
・・・、天国ならすごい。）

ぼんやりしすぎて、近くで音がするまで、人がいることに気がつか  
なかった。

「お目覚めですか？」

柔らかい声に視線を向けると、薄い金色の髪をかつちりとまとめた  
老執事が微笑んでいた。

「・・・ここ・・・は、・・・てん・・・じく？」

「水をどうぞ。」

と、力の入らないセロンの体を支えると、口元に水差しを持ってき

た。  
そつと、口に含むと水が恐ろしく美味しく感じて、しばらく飲み続けた。

「……………っはあ！ありがとうございます。」

すこし一息ついたところで、老執事に再び聞いた。  
「あの？ここは、どこなんですか？私、確か馬に乗っていた気がするんですけど……………」

「はい、旦那さまがお連れになりました。そのときには、かなりの高熱が出ておりました、

当邸で療養を致した次第でございます。」

「……………？熱……………、私どのくらいお世話になっているんでしょうか？」

「今日で、5日目でございます。お目覚めになって良かったです。」

「5日間も！！あの、すみません！！ピン……………」

ぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐう

「申し訳ありません。すぐにお食事をお持ちいたしますね。」  
真っ赤になったセロンに、優しく微笑むと部屋から出て行った。

ポスつと、枕に体をうずめ布団を頭からかぶると、セロンは身悶えた。

（わああああん！！なんて、恥ずかしい！！何であんなときにお腹鳴らなくてもいいじゃない！！）

「でも、お腹が空いてるってことは、天国じゃなくて、どこなのここ？」

「僕の邸だよ。」

「……………！！！！！！！！！！」

老執事が出て行った扉に、あのときの青年が立っていた。

「大丈夫？びつくりしたよ。ラモントが涙ぐみながら走って行ったから、悪いことが起きたのかって・・・」と、青年はセロンが寝ているベッドに近づいてきた。

「・・・・・・・・・・。」

「あれ？忘れちゃった？僕だよ。君を助けて、ここに連れてきて・・・。」と、布団に顔をうずめ、こちらを警戒しているセロンを覗き込んだ。

「・・・・・・・・・・。」

「大丈夫？顔赤いけど、まだ熱が下がってない？」と、熱を計るためか手を伸ばしてきた。

「あなた、誰なんですか？」

青年の手を避けながら、セロンはベッドの端に寄った。

「僕？僕は、ウイレム。ウイレム・ハーリーレイ・ボル 爵位は准侯爵を名乗っているよ、便宜上ね。

それで、君の名前は？」

切れ長の瞳が人懐っこく細められる。

「・・・セロン・デイ・・・いえ、九重くのえです。」

正直、貴族にレン・テリア姓を名乗るのは怖くてセロンは、敢えて混血児の忌み嫌われる方の名前を告げた。

「セロンね・・・良かったよ。ようやく、君の名前を呼べる。」

にこりと笑うウイレムに、セロンは言いよどんだ姓名に触れないウイレムを胡散臭そうに見つめ返した。

（荷馬車で見た時は、暗くて顔もあまり見てなかったけど、品のいいシャツに規格外の足の長さに合わせたズボン・・・。細かく刺繍がしてあるくらいだから、一番いい素材のモノで仕立てているのね。たしか、准侯爵って跡取り息子ってことだよな？あの時は、協力するって言ったけど、貴族だと知ってたら逃げたのに……。）

近づいた時に、つい目が行ってしまった服装で値踏みされているとは思っていないウイレムは、首を傾げ、どうかした？と言う顔をし

ている。

そんな時、

「・・・何、怯えさせてるの？坊ちゃん。」

「やつぱり、どこからか攫って来たのではないですか？」

「やだ、サイテーね。ロリコンな主様なんて！」

突然、ウイレムの後ろから聞こえた3人の声に（この人達って心配ないの？）と、

セロンはビクビク体を強ばらせた。

使用人らしい3人が、呆れた顔でウイレムを見つめている。

「攫うなんて人聞き悪いな！断じて違うぞ！それに、ロリコンなんて、セロンに失礼だろ！」

慌てたようにウイレムは声を挙げた。

「やだ！もう名前と呼んで独り占めする気満々のね！」

サイテーと、呟いた可愛らしい容姿の女性に、

「攫ってないなら、騙くらかしたんですよ。ラumontさんが、涙ぐんでいたのも、

それが原因じゃないですか？」

短い髪に背のすらりとした別の女性が答えた。

「坊ちゃん・・・フォロー出来ません。見損ないましたよ。」

ウイレムよりは、年上らしい青年が深いため息をついた。

「お前らなあ！僕がそんなことするはずないだろう！何が独り占めだ！騙くらかしただ！僕を見損なうな！！」

と、喚いたウイレムの背後から、恐ろしく優しいのに寒気がして仕方ない声が聞こえた。

「ようやく、目を覚ましたお嬢様を前にして、何をしていらっしゃるのか、お聞きしてもよろしいですか？」

ウイレム様。」

「コッコラモント（さん、爺）！！（何て恐ろしい顔しているんだ！！！）」

ウイレムと愉快的な使用人達を瞬時に青ざめさせ、ブルブル震える4人を無言の圧力で部屋から追い出した老執事ラモントは、まるで別人の様にセロンの世話を始めた。

（この人には逆らわないでおこう。）

と、温かいスープを飲み干しながら、ラモントを見てにこりと微笑んでみせたセロンであった。

\*\*\*\*\*

セロンがウイレムと愉快的な使用人達と再び、対面したのは、老執事ラモントからのお許しが貰えた後だった。

「さて、ようやく本題に入れるね。」

ウイレムは苦笑しながら、

「改めて、自己紹介。僕がこの邸の主でボル准侯爵のウイレム・ハーリーレイ・ボルだ。」

艶のある濃いブラウンの髪は肩のあたりで軽くウェーブを描いており、切れ長の瞳はきつく見えるはずなのに、柔らかな面立ちのせいか、全体的に優しい青年に見えた。

「はじめまして、私はエセラよ。この邸の侍女でもあり、踊り子で

もありマネキンでもあるの。」

踊り子というだけあって、体に沿わせた侍女とは思えないドレスは、エセラのスラリと伸びた手足を

最大限に魅力的に見せていた。柔らかい金髪をふわふわさせてリボンで括っているセロンとそんなに年は変わらない少女はにこりと笑った。

「私は、ミレン・椿<sup>（おん）</sup>。あなたと同じ混血のお針子よ。得意なのはレス細工よ。これから宜しく。」

声を聞かなければ、男性かと思うくらいに短い黒髪に背の高い女性は、セロンに握手を求めた。

握手をした途端にセロンは、ミレンの手の状態から自分と同じ匂いを感じた。

「で、僕がジョエル・スミス。画家でデザインを担当している。君が居たビンセント・スミス工房から事情は聞いているよ。」

明るい金髪の落ち着いた雰囲気持つ青年は、セロンが気になっていたことを教えてくれた。

「スミス様のお知り合いなんですか？」

「伯父なんだ。君を心配して連絡してきた。伯父は仮にも、貴族相手の仕事だし、公に君のことを探るのは厳しかったらしくてね。僕がボル侯爵家に仕えているのを知って、君の安全を確認出来ないかって言われたわけ。」少し、すまなそうに話すジョエルに悪気は感じられなかった。

「スミス様が……。」

家族の居ないセロンにとって父の様な存在である、スミス氏が自分を心配してくれて助けてくれたことに、

セロンは胸がいっぱいになっていた。

「そんな訳で、セロンを探したら、あんな出会いになったんだ。怖がらせて悪かったけど、セロンも命を粗末にしちゃいけないよ。」

と、ウイレムは、話を引き継ぎ、最後は真面目に説教をしながら、

セロンの糸切りバサミを手渡した。

「これじゃ、痛いだけだからね。」

手渡された糸切りバサミをボンヤリ見つめて、口を開いたが、ただぎゅっと握りしめただけだった。

（本当は、あなたを攻撃するためだったなんて、いまさら言えないよね。）

「セロン？」

「ウイレム様。お嬢様にいきなり話をし過ぎたのかもしれない。体調も万全では有りませんし・・・。」

眉を八の字にして、老執事ラモントは、黙って糸切りバサミを握るセロンを、心配そうに見つめている。

「・・・大丈夫です。すみません、ラモントさん。私も自己紹介を、セロン・九重くのえです。」

ビンセント・スミス工房のお針子をしています。今は・・・、なんだが大変なことになっていきますけど・・・。」

弱弱しく苦笑いをするセロンにウイレムは妙に保護欲が沸くのを感じた。

「セロン「大丈夫よー！私もみんなもいるから、セロンは、頑張ってお仕事してくれば、私たちが守るわ！」

エセラがどーんと任せなさいと、胸を叩いた。可愛らしい見かけによらず姉御肌のようだ。

「うん、エセラ。僕が話して「細かい作業は私の方で進められるから、セロンは土台作りが担当かしら？」

ミレンが首を傾げながら、作業がどうのと言い始めた。

「ミレン！君も僕の邪魔するのか「じゃあ、デザインは基本的なものにアレンジを加えて・・・。」

ジヨエルもそれに加わった。

「お前ら！僕が話してるのに邪魔ばかりして、何が楽しいんだ！

「！！！！！！」  
我慢に限界がきたのか、ウイレムは頬をヒクヒクさせながら、低い声で唸った。

「……旦那様をからかうのが、楽しいに決まっています（よ。ねー。）」  
「……」

3人は、声をハモらせて、嬉しそうに応え、ウイレムは、絶句して肩を落とした。

愉快的使用人達にからかわれている、ウイレムを少し気の毒に思いながら、セロンは仕事って何のことだろうと聞いてみた。

「あの、ボル准侯爵さま。仕事とか作業って何の話なんですか？」  
聞かれたウイレムは頭を掻きながら「ボル准侯爵さまね……。」と、ぼそぼそ呟いていたが気にせず、  
セロンはウイレムを見つめた。

「セロンに聞いたよね。助ける時にこのまま貴族の思惑通りになるか、僕に協力するかって？」

思い出しながら、セロンは頷いた。

「ここ最近、貴族に雇われている職人や芸術家達が失踪していることは知っているかい？」

普段から、あまり回りに関心を持たないセロンには初耳だったので、首を横に振った。

「まあ、公になっっていることじゃないからね……。失踪しているのは、まだ、世には出始めたばかりの若手や新人と呼ばれている職人達だ。ここまで言えば分かるかな？」  
少し、心配そうに自分を見つめているウイレムが尋ねた。

「私がキュアールという所に連れて行かれたことと関係している……。」

（あなたは、私専用のお針子……。）」

ふと、アネットの顔が浮かんできてセロンは体を強張らせた。

「そう、多分、君も失踪者になっていたはずだよ。」

「あんなことをする貴族がまだ居るってことですか？」

「貴族の端くれの僕が言うのもなんだけど、そうだね。このことは、大貴族が絡んでいる。」

うかつに手を出すと、痛い目を見るのはこちらなんだ。」

「……だから？ドレスを作るのですか？」

「貴族にいやな目にあわされている君に、貴族のドレスを作れって言うのが酷なことだって、

分かっているけど……、大貴族であるベインズ公に目をつけられている君が一番の適任だって

思うよ。」

「……、囿ですか？」

「……正直に言えばね。証拠がほしいんだ。」

俯いて、糸切りバサミを見つめるセロンにウィレムは、彼女の考えがどうであれ、

このチャンスを何とかモノにしたいと、貴族に不信感を持っているセロンに正直に話してみたつもりだった。

出来れば、無理強いはしたくない……。

もっと、言いくるめて反論できないようにしようかと口を開きかけた。

「レン・テリアの一年は20ヶ月です。そのうち、社交界のシーズンは16ヶ月あります。」

今は、10ヶ月が過ぎたところですよ。シーズン後半に必要なドレスはなんだと思いますか？」

俯いたままセロンがウィレムに尋ねた。

「え？あの、セロン？」

「必要なドレスは、婚約披露会や結婚式に着るドレスです。」

「うん。あの・・・、セロン？」

「ウエディングドレスは、時間がかかる上に大抵は、信用が置ける仕立屋に注文をして約3ヶ月。」

「そうなんだ・・・時間がかかるんだねえ。」

豆知識を聞いて、ウイレムはふむふむと頷いた。

「なので、ある程度の自由と格式を重んじるタイプで攻めていこうと思います。」

「・・・それって、ドレスを作ってくれるってこと？」

黒曜石の瞳に自分が映っているのを見つけたウイレムは、今まで見てきたセロンが、

全くの別人に思えるほどキラキラと輝く宝石を見つけた気分だった。「私は、ボル准侯爵さまと約束をしたのではなく、あの夜に私を助けてくれた人に

協力すると言っているまでです。その辺を勘違いしないで下さい。」  
照れ隠しなのか、貴族が嫌いなことを妥協案で協力しようとしているセロンが可愛らしい。

「分かった。じゃあ、ただのウイレムに協力してドレスを作ってくれ。」

「ええ、最高にすばらしいモノを作り出して、囃としての役割を果たします。」

「貴族の思惑にはまってるかい？」

くすくすと笑うウイレムに、

「翻弄されていないもの。これは、私が選んだ人生です！」

セロンは、むきになって声をあげた。

「では、改めまして。僕に協力してくれますか？セロン・九重くのえ」  
ダンスを誘うかのように手を差し出し、腰をかがめた。

「・・・はい。」

少し、照れているのかそっぽを向きながらも答えてくれたセロンの手を握り、恭しく唇を寄せた。

途端にカツと真つ赤になったセロンに、柔らかくも甘い瞳で見つめていたウイレムを老執事ラモントは  
それはそれは嬉しそうに見つめていた。

(おまけ)

「……じゃあ、改めて宜しくね。」「」

エセラ、ミレン、ジョエルが笑顔で握手を交わした。

「良かったわよねー。主さまがあれ以上なんかセロンに言うなら、とび蹴りしようと思ってたところよ。」「

明るくいうエセラに(踊り子じゃなくて格闘家だったの?)

「私は、ズボン丈を全て短くしようと裁ちばさみを用意するところだったわ。」「

ふふと、怖い笑みを浮かべるミレン(それはそれで面白いかも・・)

「あー、僕は邸にある坊ちゃん絵にちよび髭を書こうかと絵の具の配合を考えたよ。」「

と、ジョエルは楽しそうに笑った(悪意が感じられないのが不思議・・)

「お・ま・え・らあああああああ!……!」

どたばたと、ウィレムと愉快的な使用人達の攻防を見ながら、セロンは家族が居たらこんな感じなのかなと、ふと、たわいも無いことを思った。

「騒がしくて申し訳ありません。」

老執事のラモントがお茶を用意しながら、セロンに謝ってきた。

「いいえ。見たことのない光景なので何だか不思議です。」

その言葉に、この少女には家族が居ないことに気づいた。

「これから、お嬢様も馴染んでいけばよろしいですよ。」

にっこり笑うラモントに曖昧に笑顔を返した。

「ありがとうございます。ラモントさん。。。」

「それから、この部屋のマスターキーは、私しか持っていません。」

「?はあ。。。。。」

「必ず、寝るときや作業で一人になるときは、鍵をかけてくださいませ。」

いつ何時、不貞のウィレム様が入ってくるやもしれませんから。」

「え?ボル准侯爵さま?」

「長く、旦那様に仕えておりますが、お嬢様への接し方には度を越すものが多く見受けられ、

まさかとは思うのですが。。。。。」

「え?ラモントさん。。。。。」

「ラ・モ・ン・トツオオオオオオオ!!」

「では、お嬢様。鍵は必ず閉めてくださいませね。」  
突進してくるウィレムをひらりとかわすと優雅な仕草で退出して行った。

「変な人ばかりが居るところに来ちゃったなあ……。  
ポツリとつぶやいた言葉が静かになった部屋に響いた。」

中編？（後書き）

遅くなりました。

何だか、ウィレムと愉快的な使用人たちが暴走していくのが止められない・・・。

次回はそんな話です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5099s/>

---

仕立屋娘と准侯爵の事情

2011年5月23日09時59分発行